

2023年2月5日 No.3653 週報上掲載

先週の講壇から

「何でもない幸せ」

詩編 第32編 1節～7節

聖句「いかに幸いなことでしょう。／主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。」(32:2)

1. 《欲しがりません》 「贅沢は敵だ！」や「欲しがりません、勝つまでは」という戦時スローガンは、第一次大戦下ドイツの国民標語「金貨よりも鉄だ」が本家本元とされています。衣食住のような人間としての当たり前の欲求を、戦争遂行という国家目的のために、皆が犠牲にしなければならなかったのです。全体のために、個人の思いや考え、ささやかな願いまでが踏み躪られていった、その象徴が「欲しがりません、勝つまでは」ではないかと思えます。
2. 《幸せになりたい》 人間は誰でも幸せを求めているのに、どうして戦争が起こるのか。その同じ人間が殺し合いをするのか。そんな疑問を胸に、大戦前夜のドイツの庶民の生活と心情を聞き取り調査した人がいます。インフレと格差社会の中で貧困に喘ぎ、将来の展望を奪われた人たちが、力強いスローガンを掲げるナチスを支持するようになったのです。政権を獲ったナチスは、やがて社会的少数者や弱者を(文字通り)抹殺して行きます。そして皆が地獄の戦争に巻き込まれるのです。自分の幸せを求めるから、戦争が起こるのです。殺し合うのです。「関係ない」と思っていることが、いずれ私たちの命と暮らしを直撃するのです。
3. 《何でもある幸せ》 戦後の日本社会は幸せだったでしょうか。家電業界は時代ごとに「三種の神器」と称して、それを所有することが幸せであるかのように謳って来ました。「何でもある幸せ」です。村上龍は小説『希望の国のエクソダス』の中で、中学生に「この国には何でもある。希望だけがない」と言わせました。「詩編」には「幸いなるかな」という句が何度も繰り返されます。「幸い」とは「前に進む、上手く行く」の意味です。但し、私たちにとって都合よく「上手く行く」ことではありません。私の願いではなく、神の御心が実現することです。私の思いと行ないが、もし御心に適ったとすれば、それこそ「幸い」なのです。神の祝福や恵みに気付くことです。「何でもない幸せ」にこそ、祝福があります。

朝日研一朗牧師